

MECCだより

武蔵野・多摩環境カウンセラー協議会広報紙 第10号 2006年3月

もくじ

巻頭言・新年度に向けて	高橋 博良
環境教育—環境省「我が家の環境大臣」プロジェクト—の進捗状況	泉 浩二
外環問題をめぐって環境教育について思うこと	中西 由美子
環境教育 ECUの動き	富川 昌美
ディーゼル車とバイオディーゼル燃料	宇野 哲夫
新人紹介	上原 邦弘

巻頭言・新年度に向けて

理事長 高橋 博良

春うらら・待望の季節を迎えました。3月、総括と反省をしましょう。

- ①当協議会はEA21に特化したように活動を展開しました。
- ②地域事務所『東京中央』設立への多大な協力・自治体イニシアチブプログラム実施の八王子市への全面協力（本年度分は5月頃終わります）
- ③武蔵野市の環境講座（6回目）グリーンパートナーも1歩前進・新年度も期待できます。
- ④立川市も動き始めました。
- ⑤個別案件多数・増加傾向です。

一方、市民活動は神田川サミット・外来魚の緩やかな駆除（釣り）を幼児・少年・身障者への環境教育と併せ実施、好評を背に更なる工夫を重ね展開するものと確信します。

さて、18年度は「環境教育」を前面（全面）に掲げることになりました。但し、狭義の教育ではなく、広域に広げた環境活動を教育の一環と捉え・意識して展開することが重要と思います。例示するまでもありませんが、EA21認証を目指す事業所支援の場合、認証の要求事項に「教育」がありますが、全体が教育＝啓蒙と捉えるべきと思います。小中学校へ

の講師派遣事業（環境省）への登録者は多数いますし、出前教授、教師研修支援など必要に応じて、と思っています。環境カウンセラーの18年度は活躍が期待される年と思います。「環境教育」を念頭に、協議会としてメンバーとして、縦横に活躍することと思っています。

どうぞ、よろしくご支援賜りますようお願い申し上げます。



環境教育—環境省「我が家の環境大臣」プロジェクト—の進捗状況

泉 浩二

環境省「我が家の環境大臣」プロジェクト(環境保全の取り組みを行う家庭を登録し、参加型コンテンツを利用してエコライフの実践)の進捗状況について報告いたします。

1. 取組状況

MECCでは05年8月に、会員8世帯25名で「メック・エコスターズ」名で団体登録をし、教材とし配

布された「えこ帳」で、各家庭で実行可能な取り組みのヒントを得てそれぞれ取り組むと共に、団体として共通の取組としては、まず、「えこ帳」のエネルギーチェックを進めています。

また、可能な家庭ごとにウェブ登録(世帯・団体)を進め、現在、団体集計に登録している世帯数は4世帯となっており、06年1月の団体集計の結果は、以下のとおりとなっています。

メック・エコスターズの団体集計(06年1月)の現状 (06年2月21日現在)

団体参加世帯		時期・前年同期からの削減量	電 気			都市ガス		
			CO ₂ 排出量集計値	入力世帯数	CO ₂ 排出平均	CO ₂ 排出量集計値	入力世帯数	CO ₂ 排出平均
世帯数	合計ポイント数		Kg・CO ₂		Kg・CO ₂ /世帯	Kg・CO ₂		Kg・CO ₂ /世帯
4	1170	06年1月	197.3	2	98.6	58.1	1	58.1
		前年同月から の削減量	-51.4	2	-25.7	-1.9	1	-1.9

(ウェブ登録可能な方で、まだ団体集計への参加登録をしていない世帯は登録・入力をお願いいたします)
なお、ウェブ登録での自動集計とは別に団体登録全世帯の集計を行う予定にしています。

2. 今後の取組

これまでの市民・学校向けの環境教育支援、事業者向けの環境経営支援といったメックの団体としての取組とともに、有志会員による自らの家庭での「エコライフ」への取組を、できることから率先して実践していきます。

教材として配布された「えこ帳」などを活用しながら、各家庭での、エネルギー、廃棄物、排水等の現状を把握し、可能な環境配慮を考え、実行しチェックする「家庭版EMS」といった取組から、さらに、これらの取組事例を地域の催しで発表することにより、普及・啓発につなげていけたらとも考えています。

EA21による事業所での取り組みと、我が家の環境大臣事業による家庭での取組を両輪として、点から地域での取組へ広がりを図り、持続可能社会へ向けての歩みの一歩となればと思います。

なお、家庭での省エネとして省エネルギーセンターによる「ファミリーエコ事業」が「我が家の環境大臣」登録をしている世帯等に対して実施され、

- ①省エネナビ家庭型の設置
- ②シャワーの節水ヘッド
- ③ガスのイオンパワーシートによる節減

の取組が05年12月より行われ、1世帯が参加している。

3. 「我が家の環境大臣」全国事務局

事務局は日本環境協会が運営しております。「メック・エコスターズ」の団体紹介ほか「我が家の環境大臣」事業の詳しい内容は下記のウェブサイトを参照してください。

<http://www.eco-family.jp/>

外環問題をめぐって環境教育について思うこと

中西由美子

●はじめに

環境教育がなぜここ数年で、頻繁に取り上げられるようになったか。ひとつは、地球規模の環境問題が、もはや私達の生存をも脅かしかねない段階へと確実に進んでいるから。しかし、それよりもっと深刻といえる理由は、環境への理解が、ここ30年ほどの間に随分衰退してしまい、それによる弊害が深刻な問題として、実社会や実生活の表面に現れ始めたことがあるだろう。私は本稿では、日本におけるケースについて論じたい。

提起された外環問題を読んでみると、住民の環境の知識の強化だけでは解決できない問題であると感じる。「環境」というものを認識する際に必要な「つながり」の意識や感覚を持たない現代人の、言ってみれば「環境の中で生きていく能力」の衰退が重大な問題のひとつであると考えられる。

(外環：外かく環状道路)

●私たちが失ったもの

私達は、戦後、効率主義、合理主義、経済至上主義の価値観が支配する世の中に、少々長い期間晒されすぎてきた。外の世界のさまざまな要素とのつながりや因果関係を、敏感に感じとる、かつての日本人が持っていた感覚を失ってしまったのではないかと思う。かつての日本人の暮らしには、例えば、自分たちの田畑に必要な水の使い方を巡って、それこそ流血の争いもあったが、うまく折り合いをつけながら上手に利用する知恵があった。入会地や雑木林などの利用にも見られるように、自然＝環境からの恵みを享受するために、身の回りの環境のことを詳細に熟知し、こういう働きかけをすればこうなる、ああなる、という因果関係を身をもって知り、代々伝えていた。他の村や隣近所と共同で利用するために、話し合いや交渉をし、合意を形成していく「知恵」を持っていたと思う。自然とのつながりと、人とのつながりの中で、生きていく知恵を伝えていたということである。外環問題のような都市問題の解決にもこのような知恵が必要ではないか。

また、同じ時代での空間的なつながりの意識のみならず、後の世代にまで残すという時間のつながりの意識もまた、明確に持っていた筈である。それが

後世代へ伝えていかねばならない責任の意識である。これに対し、現代では、目先の利益を求めて少しでも早く成果を出し、少しでも効率的に事を進めることが求められる。しかし、その先に何があるのか、明確に答えを出せる人が何人いるだろうか。



●解決のために

外環問題を解決するために、住民に専門的な環境の知識を植え付けても、「他」の立場への理解や、自分と他をつなげる「想像力」というベースがなければ、いつまでも自分の立場からしか主張できず、互いの揚げ足取りや理屈っぽい議論が飛び交うばかりで終わってしまう。子供の喧嘩のような袋小路の議論は、大人の世界でもまだよく見かける。

環境教育を進めようという時に、強化された知識を活かすためには、先に述べたような想像力と理解—それはとりもなおさず他人への思いやりに裏打ちされたものである—それと、相手を攻撃するのではなく建設的によりよい方向へ話を向けていこうとする人間としての素養が必要である。それが揃って初めて、環境教育が実社会において有効に発揮される。いや、そうした姿勢を持つようにすることも環境教育なのだと考える。

環境教育は人間教育である。これがおろそかになっているために、信じられないような残酷な事件も多発するのだと私は考えている。この危機感から、学校教育の見直しが叫ばれている。だが、今の教育現場において、これまでの反省を踏まえ、よい方向に方向転換しているかという、正直なところ悲観的

にならざるを得ない。学力低下、カリキュラム内容など、表面的な現象にしか目が向いていない対処療法的な解決の仕方に失望せざるを得ない。

時間がかかるかもしれないが、今一度、人間の成長過程（心身共に）とはなにか、社会生活とはなにか、自然と人間との関わりとは何か、それらの哲学的な理念や思想についてとことん議論する必要があると思う。日本社会は、教育にせよ、公共事業にせよ、何にせよ、本質的な思想を紡いでいく過程や、自らと向き合う過程を欠いたまま事を進めてしまうところがあるといつも思う。深く反省せず、過失の原因・責任の所在をあやふやにしたまま、表面的に繕いお茶

を濁す。しかし、本来はそうしたことを考えつくして初めて、具体的かつ有効な方策が実現できる。しかし、残念なことにそれを決める人達が、気づいていないし、もはやそれに気づく素養を欠いているのかもしれない。

また、外環問題で教育が必要なのは、住民に対してだけではないと考える。説明する立場の行政の説明力不足、会議の形骸化等も反省すべき点ではないか。およそこのような問題は、一方の立場の人間にだけ過失があるわけではない、あらゆる立場の者に反省の余地があるのである。



環境教育 ECUの動き

ECU 副理事長 富川 昌美（環境教育担当、MECC 監事）

環境カウンセラー全国連合会（ECU）では環境カウンセラー設立の趣旨に則り、環境教育を活動の主要な柱として位置づけ、常任理事会で確認しつつ事業を進めています。さてこの事業も平成17年度は大きな転換期を迎えました。以下に概略を説明します。

まず平成16年、「環境教育推進法」が完全施行され、平成14年以降3年間継続してきた環境教育・インストラクター認定事業が、ECUの任意事業でなく政府（環境省など5省）認定団体の事業として承認される可能性があり（3年間の実績、成果など審査は厳しいがパスすれば政府認定団体として環境教育事業を行うことが出来る）、ECUは昨年から環境省との間で作業しており、2月末現在最終段階に入っています。17年度以降は育成から認定に軌道修正するとともに社会の期待に沿えるようバージョンアップすることを企画しています。それと同時に受け皿としての活動の場所づくりを昨年10月大きな権限を持って再発足した環境省地方事務所との連携によって構築したいと考えています。

2番目は環境教育の実績調査に関するものです。前述したようにECU事業は3年間で受講者1300人、インストラクターは200人を数えます。然し彼らがどのように活動の場を得、どのように活動し

ているかの実態が不明でした。そこでインストラクターおよび専門分野を「環境教育」として登録したカウンセラーを対象にアンケート調査を行った結果、約1300通の回答（約64%）があり現在解析中です。この件については昨年秋、全国5つのブロックで会合を持ちました。意識、行動において地域差が大きく、残念ながら東京など都市部では低調ですが、ECUのスタンスに協力的な地区も多く勇気づけられました。

3番目は環境教育指導者養成セミナーの継続です。業務の錯綜で毎年5ヶ所行ってきたものを今年度は茨城（2月18日）、東京（3月21日予定）の2ヶ所としました。茨城は新構想の初めてのセミナーでしたが50人以上が参加し、いい雰囲気でも成功裏に終了しました。

これらの事業の推進は環境カウンセラー、ECU、地域協議会にとって大事業ですが、実務を担当するスタッフのいないのが悩みです。筆者を含めて数人が中心になって進めています（私の場合、週2日は出勤）個人の報酬の期待できない事業だけに今後も茨の道は続きそうです。事業の趣旨を理解され、会議に出て批判するだけでなく協力の汗をかいてくれるスタッフを切望しています。

ディーゼル車とバイオディーゼル燃料

宇野 哲夫

最近バイオディーゼル燃料(BDF)の議論が盛んですが、これはディーゼル車を使うことが前提です。ところが日本では端的にディーゼル車は悪者扱いされています。従って、幾ら“BDFは環境に優しい燃料だ”と言っても、それを使う“ディーゼル車は環境に優しくない”と宣伝されていたのでは将に矛盾の見本です。

こういう矛盾を抱えたものを説明しなければならないことが環境教育ではしばしば発生します。教育者としてはそのまま知らせる訳にはいきません。受講者としては自分で判断してどう行動したらいいかを決定しなければならないからです。それが可能となるように教育するのですから、環境教育インストラクターは教育指導要領に従って教育すればいいという訳にはいきません。相当厳しい能力が要求されています。尤も温暖化問題1つ取ってみても試行錯誤の真っ只中にいますので当然なことです。

ともかくこういった現実を念頭においた上で、このテーマがどのような筋書きになるかの1試案を述べることにします。

この話では次の2つの論点についてそれぞれ説明する必要があります。

- a)ディーゼル車とBDFの性能はどういうものか
- b)ディーゼル車とBDFはどの様に運用すればいいか

a)については“ディーゼルエンジン自体はエンジンとして非常に優れた性能を持っている”ということをしっかり認識させる必要があります(BDFも含めて性能説明省略)。b)についてBDF推奨者は次のように主張しています。



ディーゼル車は植物油で動くので3つの利点がある。

- ①植物油に含まれる炭素は元々大気中にあったCO₂からきているので、CO₂を放出しても増加させたことにはならず、温暖化促進にはならない(これがカーボンニュートラル)。
- ②再生可能の燃料であるから石油危機の対策になる。
- ③ナタネ油(植物油)は中山間地活性化の手段になる。(中山間地:中間農業地域と山間農業地域を合わせたもので“村起し”によく使われる用語)

ディーゼル車にはコモンレールという優れた技術が開発され、ガソリン車と比べても全く遜色ありませんが、その性能を発揮させるには或る規格をパスした燃料でなければならず、ヨーロッパでは“EN14214”という規格を設定しています(日本には未だ規格が無い)。

ディーゼル車の問題点はディーゼルエンジンの長所がそのまま裏返しにしたものが短所になってしまうことです。つまりディーゼルエンジンは或る意味で実に良く出来ているため、多少古いエンジンに低品質燃料を使っても立派に動いてしまいます。勿論NO_x、CO₂、SPMは出し放題。更に運送業界が厳しく排ガス規制をクリアした新車に買い替えられない事情を配慮しなければならないとしたら、環境教育はどこまでやればいいのかという問題にぶつかります。今のところは、本当はこうすべきなのだが、と言って終わらざるを得ないかも知れません。

環境問題は日々の経済活動に直接関係することが多いので、その配慮が問題になります。そこから先はもはや環境問題ではないと言って逃げる手もありますが、多少余裕を持っている人は社会問題として更に取り組むべきと思います。何れにしてもここから先は非標準化の世界です。環境教育はしっかりと結論付けたことが言えないことが有ると承知しておく必要があります。

上記の様な試案を数多く蓄積した上で標準化を1歩すすめる、それを何回も繰り返して環境教育が出来上がっていくのだと思います。どのシンポジウムもどのセミナーもここから先の話はありません。ECも気を取り直して取組まなければならないのです。

新人紹介

上原邦弘さんはこの1月からMECC会員になりました。以下本人からの紹介です。

私は、環境計量証明業務・環境調査等の環境関連事業の専門会社に30年ほど勤務し、各種環境調査・分析・データ解析評価・アセスメント等に携わり、一般企業や自治体等の多岐にわたる環境管理に関与させて頂きました。3年程前に定年退職し、現在はISO14001・9001のコンサル業

務を個人で実施中。また、あきる野市の環境審議会・都市環境審議会委員として、微力ながら環境行政に参加しております。

資格：環境カウンセラー(事業)、ISO環境・品質審査員補、EA21審査人、環境計量士、公害防止管理者(大気・水質1種)、甲種危険物取扱者、作業環境測定士



環境講座(武蔵野市商工会館にて/12.2.05)

編集後記

環境教育を500～600字でまとめるのはどだい無理のようで監事からもクレームが入りました。そこでその制限を外しましたので全体として6ページになりました。今後ともテーマの性格によって柔軟に考えたいと思います。外環は多摩地域4市武蔵野、三鷹、調布、狛江を通りますので、その環境への影

響から当然話題豊富と思っていましたが原稿は仲々出てきません。編集担当としては時々断片的に話題を提供し関心を促してきましたがさっぱりでした。今回本格的な投稿があつて一瞬意外な感じがしましたがやはりほっとしました。

発行者：NPO武蔵野多摩環境カウンセラー協議会(MECC)事務局

180-0023 武蔵野市境南町1-30-1 TEL & FAX : 0422-31-7200

電子メール：QWK11724@nifty.ne.jp

ホームページ：http://www.mecc.or.jp/